

地域の再生と商店街の役割 商店街があつていい！みんなのまちづくり！

平松経営労務研究所所長
中小企業診断士 平松 徹



このシリーズをずっと取材してきて、やはり、繁盛している商店街には、それなりの理由があることを感じる。まちづくりの中で、しっかりと役割を果たしている商店街は、それなりに元気がある。そのあたりをまとめてみるのも、今後の商店街運営の中で参考にしたいだけだと思うので、一区切り付ける意味でも、今回は、まとめを書かせていただいた。

まちづくりは「民」が主役で「官」は支援が大切！

中心市街地が非常に厳しい状況になって、なかなか再生しないと

いう話をよく聞く。中心市街地活性化法ができ、タウンマネジメント機関(TMO)をつくり、計画もしっかり作ったが、今ひとつ、うまくいかないというところが多い。いろいろな原因が考えられるが、どうも、官主導のまちづくりによる限界があることが一番の原因のようだ。

まちづくりは、やはり、そこで暮らす住民が主役であり、商店街が深くかかわっていくことで活性化するのであり、行政は、それを側面支援する、黒子に徹することが大切だ。商店街が、まちづくりにどのように関わっていったらよ

いのか、いろいろなところの事例を取り上げる。

「まちづくりは「良」コミュニティ作り」から

地域が充実しているということ、地域が「充実した暮らしの場」になっているということだ。良いまちには良い暮らしの場があり、暮らしやすい場所になっており、心が豊かになる場面が随所に見られる。人々のつながりが、コミュニケーションと行動を通して、きめ細かくある。その良いコミュニティ、暮らしやすいまち、心豊かになるまちには、いくつかのポイントがある。

まず安心、安全で暮らしやすいまち

人間は危険を避けたい、安全な所において安心していたいという欲求がある。危険なまちには人は集まらない。まず、良いまちは安心ができる。

安心、安全なまちになっている。このまちの「紺屋町」のシンボルマークも有効だ。

何かを実行していくときは、不退転の決意で望むことが成功の秘訣だが、そのときに生きてくるのがシンボルだ。皆の思いを一点にひきつけるシンボルをもつこと。それを見て、気持ちを新たにできるものを持つことは、かなり大きな力がある。このまちのシンボルマークは、「紺屋町」の「紺」の糸へんがひらがなで「こんや」をつなげたものになっている。昔、ここが紺屋の町であったことを大切にしている。



「紺屋町」のシンボルマーク

維持管理する「ターゲット」を明確にしていることもポイントの一つだ。大切なことを絞って取り組むことも成果をあげる秘訣だ。よくできている。

ここでは、毎週金曜日が「一斉清掃の日」。もう七年も続いている。落書き落としも皆で実行。「きれいで住みよい町」を目指して、ごしごし歯ブラシを動かすが、一つの落書きが消えるたびに一息ついて、

会話が弾む。「住民参加」がコミュニティ作りには欠かせない。皆で決めた方向性の中で、少しずつ、コミュニティができていく。

「参加型住民」を増やすこと！

住民にも「利用型」と「参加型」があることを、大阪市立大学の石原武正先生が述べている。「参加型住民」とは「自らの生活環境の整備・改善に何らかの形で自分も参加しようとする人たち」であり、「利用型住民」とは「与えられた環境をただ受け入れる人たち」である。利用するだけの住民が何人いても、コミュニティは豊かになら

ない。参加して活動をして、コミュニティは豊かになる。

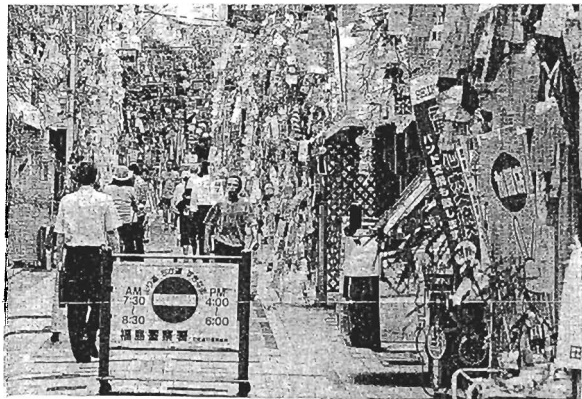
ヨーロッパのまちには、暮らしやすく、歩いているだけで楽しくなるまち、花や緑があふれ、教会などの伝統的な建物のあるまちが多い。戦争で破壊されても、住民の意思と力で復興したまちもいくつかある。これは、人々の地域に注ぐ気持ちが強いからだ。日本人は仕事に九割で、あとの少しが家庭と地域……。欧米は仕事、家庭、地域にそれぞれ三分の一ずつ力を割く。参加の割合が高ければ、その分、コミュニティは豊かになり、暮らしやすい楽しい地域になる。まちづくりはまず「参加型住民」を増やすことだ。

楽しい街は楽しいイベントで自分を表現しよう

福島市にある「文化通り商店街」は、七夕祭りを活かしたイベントで賑わいを作り出している。ここでは八月に、幼稚園児の七夕飾りがいっせいに街を彩る。商店街が地域の子どもの作品を発表する舞台を提供している。人間には根本的に自分を表現して、自分をわかってもらいたいとの欲求がある。福島市内の全域の幼稚園が参

加することで、その幼稚園児のお父さんやお母さん、おじいちゃんやおばあちゃんがこの三日間、福島島のあちこちからこの商店街に集まる。三つ子の魂、百までもということわざもあるが、小さなときの想い出は、一生忘れない。将来の大事なお客様が少しずつ誕生することになる。

飾るときは、近くの桜の聖母短大の学生が三〇人くらい、ボランティアで手伝ってくれる。この短大の授業の一環に、このイベントの準備の手伝いが入っており、終



「文化通り商店街」七夕祭り

了後に商店街で、はんこを押すことで単位が認定されることになる。とにかく、この短大の女子学生もこのイベントを楽しんでいる。準備が終わっても帰らずに、子どものために用意したくじ引きを、商店街の人と一緒に担当してくれている。楽しいこともまちづくり、豊かなコミュニケーション作りには欠かせない。

「まちづくり協議会」がまちづくりの中心装置

まちづくりにはそれを担う主体が必要だ。良い仕組みをまわしていく中心になる装置があると良い。「まちづくり協議会」という装置を作って、良いまちにするための合意形成を図って、少しずつ良いまちになっている。大阪府の豊中市のまちづくり協議会を紹介する。豊中市の、まちづくり条例によるまちづくり協議会の認定第一号。対象地域の住民約九〇〇人のうち約五三〇人が会員として参加して、平成五年二月に設立された。

行政中心で交通実験も実施

まちづくりは一筋縄ではいかな。まちは歩くことにポイントが

あるとすると、道をどうするか、それによって個々の建物がどうなるのかまで問題になる。

豊中では平成一二年四月に四日間、「交通社会実験」が行われた。正午から午後七時までの時間限定。簡単に交通実験というが、たとえ四日間といえども、日常生活の要である交通の実験なわけだから、かなり大掛かりになる。主催は立命館大学教授を委員長にした「豊中駅前地区交通調査委員会」で、豊中市はもとより、大阪府、建設省から阪急バスや阪急電鉄、地元商店街振興組合、大阪府警察までも巻き込んでの取り組みになった。

やはり、まちづくり協議会だけでは実行力に限界がある。こういうときこそ、行政の出る幕だ。この実験の結果、「商店街をモジュール化したら訪れる人が増加し安全で快適な歩行者空間が実現」、「商店街モジュール化による自動車の交通規制と併せて、公共交通の利用促進策の実施により、地区内の出入りの車の量が減少し、バス利用が増加した」などが確認された。この結果をもとに、たくさんの話し合いがもたれ、合意形成が少しずつ進んでいる。

商業者は「つやあひなぐいす」

商業者としては、まちづくりに携わっていく中で、一つ注意すべきことがある。この豊中の商店街の若手商業者は、まちづくり協議会の中で、最初は目立っての活動を控えた。信頼関係ができてきて、少しずつ商業者としてのまちづくりの推進を始めた。最初から前に出すぎると「商売人にはきつと魂胆がある」と変に勘ぐられてしまう。あくまでも、住民の視点を中核として、それに、商業者としての発想を付け加えていくといったスタンスが必要だ。

「商人が、じゃばらないことが良いみたいですね。商店街のメンバーもまちづくり協議会の委員になっているのですが、まちづくりの枠組みの中で、発言したり、提案したりしますので、他の方たちの納得も得られますし、スムーズにこことが進みます」「まちづくり協議会の小林和久広報委員」。

まちづくりにはNPOも有効な装置

まちづくりの装置としてNPOも有効だ。その一つが東京練馬区

にある「NPO北町大家族」。このNPOは、実は、地元の「ニュー北町商店街」が作った。商店街を中心に高齢者への、あたたかい思いを中心にしたボランティア活動を展開しているうちに、街の中の道路や施設についても、高齢者、障害者への配慮が足りないことが目に付くようになった。そこで、商店街としての器では、考え方の幅に限界がでてくるし、活動も制約されてしまうとNPOを設立した。もともと、この商店街では「北町優しさ宣言」を出していた。大



NPO北町大家族・高齢者の集まり

型店と同じことをやっているのはダメ、地域にしかできないことを、地域とともに取り組んでいくことが大切との考えから出した宣言だ。商店街のおかみさんたちが活発で明るい

このメニューは、たとえば「カラオケ大会」。講師の指導のもと、歌詞カードを手に全員で歌ったり、一段高い板敷きの舞台上に一人ずつ上がって、個人指導を受けたりと、わきあいあい、ずいぶん楽しい。ここで忘れてならないのが、ピンクのエプロンをつけて頑張っているボランティアの女性陣。

商店のおかみさんが中心で、このNPOの理事長でもあるトロフイー店の村上孝子さんはじめ、はちみつ専門店、ラーメン店、お惣菜屋さんのおかみさんなど、忙しい商売の間をぬってお世話にあたっている。これが、また活発で明るい。おやつを出すために立所と広間を行き来して、忙しく立ち働きのながらも、お年寄りにも声をかけたり、一緒に歌ったりと、うまく交流している。商売しているだけあって、皆さん乗せ上手だ。高齢者に対する活動のほか子育て支援のための「かるがも親子育

家」、非常時に入院患者の移動支援をする。「北町病院非常時支援」と、やはり、商店街の枠をかなり超えた活動になっている。

近くの病院の非常時支援活動を実施

その「北町病院非常時支援」は、近くの総合病院である北町病院に、何か災害などが起こったときの非常事態に駆けつけて、病人を安全なところへ移動させたりする事業だ。平成一三年九月から始めた。避難の手伝いが任務なので、一年二回ほど病院に集まって、非常口の確認などの打合せをする。現在総勢一四人。昼に出勤する組と、夜に出勤する組に分かれて編成されている。昼組には、金融機関や郵便局の職員、夜組はサラリーマンや商店街の人からなっている。それぞれできる時間帯で支援する。

地域通貨もまちづくりに欠かせない

地域通貨も、まちづくりには欠かせない道具だ。その地域通貨のひとつにエコマネーがある。エコマネーというものは「してあげる」と「してもらうこと」を媒介する通貨だ。人のつながりは「してあ

げたり」「してもらうたり」できている。それを促進する装置がエコマネー。自分でできないからしてもらったり、自分ができたり得意だったりするから「してあげる」。このやりとりがスムーズになると人間の暮らしも、少しでも楽しく豊かになる。それを媒介するには「円」という通貨は冷たすぎる。

例えば、こんな話がある。介護保険が始まる前に、自治体によってはヘルパーを派遣していたところがあるが、そこで問題になったことに盗みが多いということがあった。お年寄りが財布の中に入っていたお金がなくなっていると思っただけでも、「本当におじいちゃん、ちゃんとお金入れておいたの？」と済まされてしまう。一人住まいの高齢者などは、特にそうで、何か問題になっても誰も年寄りの話など聞かない。少しボケてきたくらいにしか考えない。「円」を稼ぐためにしている仕事だと、全部が全部ではもちろんないが、そのような非情な世界も出てくる。「円」を求めて働く場合、まさしく「エコマネー」の切れ目が緑の切れ目になる。この「円」の対極にあるのがエコマネーだ。エコマネーを

求めて働くことはあまりない。

エコマネーで「番進んではいる 北海道栗山町の「クリン」

エコマネーで一番進んでいるのが、北海道栗山町の「クリン」だ。このまちの高齢者は栗山町のエコシステムに参加して、生活に足りないものを補っている。例えば、北国特有の屋根の雪降ろし。力仕事で高齢者には大変な重労働だが、お金を払ってまではたのまない。それをエコマネーの仕組みの中で他の人にお願する。その感謝の対価として「クリン」を支払う。

純粋さを疑ってしまう。エコマネーなら「声かけ」をしての結果として、その感謝の意味で「クリン」が支払われるわけだから問題がない。海外旅行のアドバイスなど、初めての人に海外は危険だからこんなところに注意したらよいなど教えてもらったら、これは本当のお役立ち情報だ。「クリン」によるサービスがあるおかげで、不足が補われ、それぞれの生活も豊かになる。「クリン」は「円」を補う通貨だ。エコマネーをはじめとした地域通貨も、まちづくりを促進する装置として欠かせない。

事業者が中心になって まちづくりの装置に参加し 住民を巻き込んでいく

結局、大切なことは住民が積極的にまちづくりに参加し、合意形成を図ることだ。その中核は、やはり「いつも、その地域にいる」事業者。行政やNPOなどと協力して、住民参加と合意形成の装置を作り、推進する。エコマネーをはじめとした地域通貨なども、よく研究して仕組みを作り上げる。それを地道に実行し継続することで、まちは少しずつ良くなり、商店街も元気になる。



エコマネー「クリン」